

旦那さま、誘惑させていただけます！

目次

プロローグ

4

第一話 旦那さま誘惑作戦——妻の奮闘

8

第二話 運命は見合いの席に座ってる？
——夫の回想

106

第三話 恋心とは厄介やっかいで——妻の悩み

153

エピローグ

284

教会の重厚な扉が開いた途端、パイオルガンの音色に包まれた。目の前に広がる光景に、緊張と高揚感が一段と増す。

ゴシック風の堂内は、高い天井からつるされたシャンデリアの輝きと、ステンドグラスから差し込む陽光のおかげで、柔らかい光に満ちていた。

一直線に伸びるバージンロードは、真っ白な大理石。私——佐久間桃子はその上を一步ずつ慎重に歩く。向かう先には、私の夫となる人——久瀬巖さんが待っている。

彼のもとにたどり着くと、伸ばされた大きな手に自分の手を重ねる。手の平に彼の体温を感じると、緊張が和らいだ。彼と一緒に、きつと幸せな未来を築ける。そう思えた。

振り仰げば彼は切れ長の目を細め、柔らかい眼差しを私に向けている。視線が合うと彼は小さく頷いた。

私、本当に結婚するんだ……。しみじみと思う。

けれど、心のどこかでまだこの状況を信じられずにいた。なんの取り柄もなく、特に可愛げがあるわけでもない私が、こんな素敵な男性と結婚できるなんて……

夢ならどうか覚めないで……。なんてベタなことを心の中で祈る。そうして牧師さんの前で結婚の誓約をしたり、指輪を交換したり、結婚証明書にサインをしたりしたのだった。

式や親族との写真撮影が終わって退場するときも、巖さんはゆっくりと歩いてくれる。慣れないドレスとヒールに戸惑う私を気遣ってくれているのだ。組んだ腕も、がっしりしていて頼もしい。

二人並んで式場の外へ向かう。大きく開け放たれた教会の扉の向こうは光に溢れ、眩し過ぎて外の景色が見えない。

ああ、私は本当に……

教会から出て見上げた空は梅雨入り前の快晴だ。その青い空に、ピンクや白や深紅の薔薇の花びらが舞っていた。

一足先に外へ出て待っていた参列者からの「おめでとう！」の声に応えながら、私は教会の外へと続く長い階段を下りた。友人たちからは、祝福の言葉が飛んでくる。

「おめでとう！ 恋人がいるなんて全然聞いてなかったのに、突然結婚するって連絡もらってびっくりしたよ！」

私だってこんなふうにお見合いの末に結婚するなんて思わなかったよ！

「桃子、おめでとう！ すごく綺麗だよ！ ドレスも素敵ね」

ダイエットをがんばったのと、ブライダルエステのおかげだよ！ それと、このドレス、本当にいいよね！ お店で運命的な出会いができたことは、本当にラッキーだったと思う。

「もう！ 幸せになりやがれ！」

そう言うなり、籠の中の花びらをいつせいにぶちまけたのは高校時代からの友人。一瞬にして目の前が花でいっぱいになった。

「わっ！ ちょっとやり過ぎー！」

ふわりと漂う薔薇の香りの中、友人と笑い合う。

自分のことのように喜んでくれている友人たちに「ありがとう」と返している間も、なんだか夢の中にいるみたいだった。

もしかしてこれは本当に夢なんじゃないかと、指で手の甲をつねってみた。

あいたたたた………。手袋越しても意外と痛い。

「どうしたの？ 花嫁さんがそんな変な顔しちゃダメじゃない。慣れないヒールで踵でも痛くなつた？」

友人の突っ込みに「まあ……そんなとこ、かな？」と曖昧に答えた。

踵が痛いのは事実だったしね。事前に何度か履いて慣れさせていたはずなのに、緊張していつもと違うところに力が入っているのか、残念ながら靴擦れができてしまったのだ。

「でもそんなに痛くないから平気！ それに控え室に戻ったら絆創膏を貼るしね」

答えた途端いきなり体が浮いて、思わず「ぎゃー！」と悲鳴を上げた。

周りからは、わー！ とか、きゃー！ という歓声が上がっている。なにがなんだかわからず顔を上げると、間近で厳さんと目が合う。その顔の近さに、みるみる頬が熱くなった。

「いきなり抱き上げて申し訳ない。足が痛いのでしょうか？ このまま抱いていきますから、じつとして。貴女が困っていることに気付かなくて、すみませんでした」

はやし立てる周りの声を物ともせず、厳さんは平然とした態度で私を見下ろす。

「いえ、あの、これは……その……」

「私に抱き上げられるのは怖いですか？」

「いいえ！ 全然！」

即答すると、彼はふつと目を細めた。

「よかった」

ほっとしたような優しい眼差しを向けられて、壊れそうなほど胸がドキドキする。

「では行きましょう」

彼の言葉に私はこくこくと頷いた。

嬉しいやら、恥ずかしいやら、申し訳ないやら……いろいろな感情が入り混じって声が上手く出ない。彼の背中の方からは相変わらず歓声が聞こえる。

——ああ、私、なんて幸せなんだろう。

こうして私、佐久間桃子は、久瀬厳さんと結婚して、久瀬桃子になりました。

シックで品のある扉を前にして、私、久瀬桃子はふうっと小さく息を吐いた。

夢みたくない出来事の連続で、まだ頭がクラクラしている。男っ気ゼロだった私が、お見合いの席で出会った厳さんに恋をしてから約一年。よもや結婚することになるなんて！

夫となった久瀬厳さんは、大きな弁護士事務所の跡継ぎで、とても優秀な弁護士。歳は私より九歳上の三十五歳。いつも穏やかで優しく、大人の余裕に溢れた素敵な人だ。

そんな彼に、お見合いからわずか二か月でプロポーズされたときは、「夢じゃないよね!」と疑わずにはいられなかった。だって、こんなに魅力的な彼に対し、私は彼と出会うまでお付き合い経験もなかったような、冴えない平凡々な女子なのだ。

結婚式当日の今日でさえ、これは夢なんじゃないかと何度も自分の手をつねった。

そうして式を終えたあとも、夢見心地のまま披露宴や二次会、三次会が続ぎ、あつという間に一日が過ぎていった。宿泊先のホテルに帰った今はすでに二十一時を過ぎてている。

私たちは今日、明日とスイートルームに二泊する。

そんな豪華な部屋に泊まるなんて生まれて初めてなのでドキドキだ。

それ以外の理由でもドキドキしているけれど、深く考えたくない。考えたら動けなくなりそうだから。深く考えちゃダメだ。

——そう、今日が新婚初夜だなんて……

あああ！ 考えないつもりだったのに考えちゃったじゃない！ 忘れる、忘れる、忘れるんだ、私。

厳さんが部屋の鍵を開けるのを見守りながら、内心はすでにパニック状態だった。なにを隠そう私はオタクというやつで、これまで趣味一筋で生きてきた。だから異性とお付き合いしたことがない。そのためこういう状況を経験したことだって、もちろん、なくて——つまり、その……処女なのである。そんな私の焦りを知るはずもない厳さんは、開錠の音とともに私のほうを向いた。ゆっくり見上げると視線が合う。

どうしよう、こういう場合、どうすればいいんだろう!? 黙ってればいいの? それともなにか気の利いたことを言うべきなの? ところで気の利いたセリフってどんなやつ!? なんてことが頭の中を駆け巡る。さあ、どうしたらいい? 為す術もなく、ごくりと唾を呑み込んだ。

「開きましたよ。——どうぞ」

がちがちに緊張している私とは違い、彼の態度はあつさりしたものだった。

「はいっ!」

声があつたのは、挙動不審で申し訳ないと思う気持ちと、緊張がごちゃ混ぜになったからだ。厳さんが小さく笑ったので、恥ずかしくなる。

「緊張してる?」

「や、わ、わ、わた、わた、私は、ききききき、緊張なんて……して、な……」
嘘、ウソ。思いつきりしてよねええええ！

いや、その前に誰も緊張してゐるかなんて聞いてない！勝手に暴露してどうする。
内心で思いつきり突っ込みつつ、厳さんが怒ったりしないかなと不安になる。

厳さんは温厚な人だけど、こんな見え透いた嘘をつかれたら腹を立てるかもしれないじゃない？
そう思いながら、恐る恐る彼の言葉を待つ。

が、声はかからなかった。その代わりに彼の大きな手が後ろから両肩に置かれる。包み込まれた
肩口がじわりと温かくなる。

「安心してください、桃子さん。私は貴女に無理強いをするつもりはありませんから」

背後から私の耳元に顔を寄せ、厳さんは優しい声でささやいた。

「だから、そんなに緊張しないでください。ね？」

なだめるような口調が私の頭にしみこんで、焦りがすうっと消えていった。

彼の声は魔法みたい。

「ごめんさない。私、初めてだからこういうとき、どうしたらいいのかわからなくて」

初夜だのなんだのと一人で意識しては、勝手に取り乱す。そんな自分がひどく幼稚に思えて恥ず
かしい。

「そのことは以前お聞きしています。それに、今は式や披露宴を終えたばかりで神経が昂つてい
るでしょうから無理もありません。ちょっと休みませんか？」

彼に諭され、広いベッドの端に腰を下ろした。並んで座った厳さんが自然な仕草で私の肩を抱き
寄せる。彼の匂いが鼻腔をくすぐり、安心と緊張が入り混じった不思議な気持ち湧いた。

肩に回された腕の温かさが心地よい。

この雰囲気壊すのはもつたないけれど、私にはどうしても聞いておきたいことがあった。

「厳さん」

「なんですか、桃子さん？」

これまで怖くて聞けなかったことも、今なら聞ける気がした。

「私で……よかったですか？」

モテない、冴えない、そしてバリバリにオタクな私が、どうしてこんな素敵な男性と結婚できた
のか不思議でならないのだ。

結婚式まで挙げたのに、今さらその質問？ という感じだけど。今までは自分に自信がなくて、
素直に正面から聞けなかったのだ。

厳さんは仕事ができるだけでなく、プライベートでも思いやりがあつて気配り上手で、非の打ち
どころのない人である。お付き合いしているときも、緊張してテンパってしまう私をさりげなく
フォローし、優しくリードしてくれた。

彼のようにハイスペックな人なら、もっと綺麗な女性だつて選べたに違いない。私と結婚してく
れたのは一時の気の迷いなんじゃないか……なんて思えてくる。だつて、出会つて一年と経たない
うちに結婚したのだ。その可能性だつてないと言ひ切れない気がする。

地味で、目立たなくて、ファッションセンスにはからつきし自信なし。いつも無難な服とメイクと髪型。一応、標準的な体型の範疇には入っているものの、バストはもうちよつとポリウムが欲しいし、ウエストのくびれもほしい。おまけに油断するとぼこつとしちやうお腹も、大き過ぎるヒップもコンプレックスだ。結婚が決まっただけで、行つたダイエツトと、ブライダルエステのおかげで、今までの人生で一番、理想の体型に近いとはいへ、近いだけで理想じゃない。

しかも、容姿が平凡な上に——オタクなのだ。まあ、オタクなのはお見合い当日にバレてしまっているんだけど、これから一緒に住むうちに『ここまでひどいとは思わなかった』なんて後悔されたらどうしよう!? そんな心配が引きも切らず襲ってくる。

「貴女だから、ですよ」

彼は甘くて優しい声で返してくれた。

次の瞬間、私はぎゅつと抱きしめられていた。

スーツを着た厳さんの広い胸に頬が触れる。トクトク、と微かに聞こえるのは彼の心臓の音だ。彼の腕の中はうっとりするほど心地よい。その一方で、本当に私はここにいていいの？ 他の誰でもなく私でいいの？ そんなふうになんか揺れてしまう。

「でも私なんてなんの取り柄もなく。厳さんと全然釣り合わない……」

「バカなことを言わないでください」

大きな手が私の後頭部をゆっくり、ゆっくり撫でる。指で髪を梳かれるごとに、心配事なんてなにもかも忘れて、ただ甘えてしまいたいという気持ちが強くなる。

「素直でがんばり屋で、眩しいくらいひたむきで、そういうところに惹かれたんです。変に気取ったりしないし、少々慌てん坊なところも可愛らしい。それに、最初から『私』を見てくれたことと……」

そこで言葉を区切り、彼は悪戯っぽく微笑した。

「それから、私を見ても怯えなかったことに幸せを感じました」

「怯えるなんて！ 絶対ありえませんが……見惚れることはありませんけど」

うっかり心の声までこぼれてしまった。慌てて口を押さえたけれど、出てしまった言葉は戻らない。恥ずかしくて頬が一気に熱くなった。ああ、もう！ 思ったことがつい口から出ちゃう癖、直したい。「それは嬉しいな」

そう言った厳さんは嬉しそうだけれど、少し困ったような、そんな複雑な顔をしていた。はにかむ彼が可愛くて、胸がきゅんとした。

「ねえ、桃子さん。私もたびたび貴女に見惚れているんですよ。可愛くて目が離せなくなる」

まさか。そう言っただけで否定しようと聞きかけた唇は彼の指で押さえられてしまった。彼は最後まで聞いてほしいと言いたげな視線を送ってくる。

「こんなに強く、誰かと一緒にいたいと思つたのは初めてです。貴女のことを思うとね、平静でいられなくなるんですよ。愛というのは本当に厄介なものです。この歳になつて初めて知りましたねえ、桃子さん。これでは結婚したい理由として足りないですか？」

甘く熱いささやきを受けて、胸が壊れそうなくらい早鐘を打った。

なにか気の利いた愛の言葉を返せばいいのに、嬉しくて頭が真っ白でなにも思い浮かばない。私だって好きなのに。厳さんのことを思うと切なくて、何度も眠れない夜を過ごしたのに。

「あ……わ、たし……」

私の口は無意味に震えるだけ。思うように動かない舌がもどかしい。

「貴女は？ 貴女も、そう思ってくれた？」

彼の吐息が耳を掠める。そしてうなじに熱い唇が触れた。

「あっ！」

初めての感覚に背中がぞくりと震える。耐えられなくて、声が漏れてしまった。

答えを促すように、彼の唇はゆつくりと私のうなじから肩へと滑る。そのたびに甘い戦慄が背を走り、知らず知らずのうちに彼の手をつかんでいた。

「桃子さん？」

彼の吐息が肌にかかって、泣きたいくらい切ない。

「私も……厳さんが好き、です」

やっと絞り出した声は掠れていた。

「好きで、好きで……どうしようもないくらい、好き」

デートを重ねるたび、厳さんのことを知るたび、彼を好きな気持ちはどんどん膨らんでいった。そうして気が付いたら、真剣な顔も、照れたような笑顔も、私をからかう楽しそうな顔も、彼の全部を独り占めしたいと考えるようになった。

だからプロポーズされたときは嬉しくて……

「嬉しいですね。貴女の口から私に対する想いを、やっと聞けた気がする」

彼の言葉にどきりとする。恥ずかしさが先に立って、今まで自分の気持ちをきちんと伝えていなかったことに気が付いた。

お見合いのあとだって、プロポーズのときだって、厳さんから切り出してくれたのだ。私はただ「はい」と返事をしただけ。

「ごめんなさい！ 私……」

恥ずかしかったからなんて言い訳にもならない。こんな大事なことをおろそかにしていたのが申し訳なくて、血の気が引いた。

「いいんですよ。貴女が私のことを憎みからず思ってくれていることは、ちゃんと伝わっていましたから。すみません。今日は少し酔っているみたいです。どうしても貴女の口から聞きたくなって、意地悪をしました」

「意地悪だなんて、そんなことないです！ 私が悪いっ……え？ ……わ!?」

言葉が唐突に途切れたのは、顎をつかまれてくいと横を向かされたから。

なにが起きるのか理解できないうちに、唇を塞がれた。一瞬遅れて、自分がキスされたことを理解した。

触れるだけの軽いキスだったのに、彼の体温が私の唇に移っている。けれど、それもすぐ消え去ってしまう。

彼とのキスはいつだって心地よくて、そして少しだけ切なくなる。プロポーズを受けたとき、彼とした最初のキス——私にとつてのファーストキス——からずっと、この甘さと切なさは変わらない。

名残惜しくて、自分の唇に指で触れた。その指を彼が取り、指先にもキスを降らせる。彼の唇が触れたところから溶けてしまっそうだ。

「私に、こういうことをされるのは嫌ですか？」

「まさか！」

全力で否定して、彼に向き直った。

「嬉しい、です……」

今度こそきちんと気持ち伝えずには、とがんばるが結局声は小さくなってしまった。それを誤魔化すように、私は勢いよく顔を上げた。

「キ、キスするのさえ嫌な人と結婚なんてしません！」

キスを嫌がっていたと思われたくなくて強い口調で言う。すると彼はきよんとした顔をして、それからふっと噴き出した。

「それもそうだ」

なにかそんなに彼のツボを突いたのかわからないけれど、彼は声を上げて愉快そうに笑った。そしてひとしきり笑ってから、ふっと真顔に戻って私の目をのぞき込む。真剣な顔なのに目には轟惑的な光が浮かんでいて、私は動揺のあまり声を上げそうになった。かろうじて堪えたものの、喉の

奥で「ひう」と変な音が鳴る。

厳さんは私の狼狽える様子を見て、ゆっくりと口角を上げた。彼の妖しい引力に心が吸い寄せられる。

「じゃあ、もつとしてもいいかな？」

「え？ ——ふ、んんっ」

彼の言ったことを理解するより先に、彼の顔がどんどん近付いて唇を塞がれた。優しいキスとともに、私の体はそつとベッドへ横たえられた。

顔の両脇には彼の逞しい腕。退路を断つように囲い込まれて、緊張と期待と興奮が頭の中でせめぎ合う。ごくりと唾を呑み込むと、自分でも驚くほど大きな音がした。

至近距離で私を見下ろす厳さんの顔に、先ほどの笑みはない。真剣な表情の彼の顔は、照明を背にしているため影ができていて、なんだか淫靡だ。まるで違う人のように見えて心細くなった私は、手を伸ばして彼の頬に触れた。

途端に彼が私の指をばくりと啞えた。柔らかい唇にはさまれた私の指先を、熱くぬめるものがちろりと掠める。

「あつ、んっ……」

いきなり与えられた官能的な刺激に息が詰まる。

「桃子さん。——かまいませんか？」

「はっ」

なにを？ とは聞かなかった。聞かなくても彼が言いたいことはわかったから。

いよいよだと思ふ気持ちと、不安と期待がない混ぜになって、体が小刻みに震えていた。

「嫌だと思つたら、遠慮なく言つてください」

「でも」

「私たちは夫婦になつたんですよ？ 今日がダメでも、気長にやっていけばいいんです。違いますか？」

「違い……ません」

切れ長の目が、驚くほど優しく細まつた。そのことに安心して、全身から余計な力が抜けていく。「では、今日のところは無理なくできるところまでで、ね？」

穏やかな声に私はこくこくと頷いた。

それを合図に彼の手が私の頬に触れた。頬を緩やかに撫でた指はゆつくりと下に滑り、頤をつかむ。それと同時に彼の唇が下りてきて、私の唇と重なつた。さっきの優しいキスと違い、熱がこもっていた。熱い唇が、私の唇を軽く食む。ついばまれるたびに、胸がきゅんと痛んだ。

「んっ……」

無意識のうちに鼻にかかった声漏れていた。慌てて声を止めようとしたけれど、抑え方がわからない。このままキスを続けたり、もつと大きな声が出てしましそう。それが恥ずかしくて彼の唇から逃れようとしたけれど、頤をつかまえられていて逃げられない。

「やっ……」

キスの合間に抗つたところ、彼は甘く低い声でささやいた。

「嫌ですか？」

「ちが……、声が……漏れて……恥ずかしいから」

だからもう少しお手柔らかに、と言いたかつたのに。

「声を抑える必要なんてありませんよ。私は貴女の素直な声を聞きたい」

そうささやくなり、彼はまた私の唇を塞いだ。

今度のキスは今までよりも深く荒々しい。唇を舌で舐められたり、そこに軽く歯を立てられたり。そのたびに体の奥に得体の知れない熱がたまって、眩暈がする。

キスと同時に、私の顎をつかんでいるのは反対の手が、私の腕や肩のあたりを優しく撫でてくれる。

優しい愛撫と徐々に深くなるキスに酔っていると、彼の手が私の胸に唐突に触れた。

「ん……あ……っ！」

突然の鋭い刺激に背がびくりと跳ねる。

喘ぐために開いた口腔に彼の舌がぬるりと侵入してきた。

——ディープキス。

知識では知っていたとはいえ、こんなに生々しい感触のものだとは思つてもいなかった。

彼の肉厚な舌は、私の口の中をゆつくりと蹂躪する。驚いて縮こまった私の舌を誘い出すように撫でたり、口腔内に官能のポイントを探すべく、上顎や歯列をゆつくりと愛撫したりする。

「んっ！ あっ……ん……」

鼻にかかった甘え声が絶え間なく漏れる。こんな声を聞かれるのは恥ずかしいけれど、彼から与えられる刺激が気持ちよ過ぎて我慢できない。

気が付けば彼の巧みな誘導に負けて、自分から彼の舌に自分のそれを絡ませていた。喘ぎ声に、ピチャピチャといやらしい水音が混じる。嚙下しきれなかった唾液が口の端からこぼれ落ちて、その跡が冷たく感じられた。

一方、彼の手はゆっくりと私の胸をまさぐっている。服の上からの愛撫は、初めこそ強い刺激に感じられたけれど、時間が経てば経つほどどかしく思えてきた。もっと強い刺激が欲しくて、じりじりする。どうしようもない焦燥に耐えられなくて、あさましいと思いつつ腰をくねらせた。そうしたら耐えられそうな気がしたのだ。

すると、動いた拍子に自分の体の中心がぬめっていることに気付いてしまった。ぬめっているだけでなく、小さな水音すら立った気がした。小さな小さな音だから、きつと彼には聞こえていない。そうは思うけれど、恥ずかしくていたたまれない。しかし、体の奥からやってくる衝動には逆らえなかった。

「厳さ……ん……もう」

キスの合間に懇願する。

「ええ、わかりました」

厳さんの冷静な声に、どきりとした。私はもうなにも考えられないくらい夢中なのに、彼はまだ

余裕なんだ。そう思うと自分だけが先走っているようで怖い。

視線を感じて顔を上げると、厳さんが私をじつと見下ろしていた。息は少しも乱れておらず、表情も冷静さを失っていない。ただ、切れ長の鋭い目の奥には熱が見え隠れしていた。

彼の手が背中に戻り、私のワンピースのファスナーを下ろす小さな音がした。すると感じるのは、解放感と心もとなさ。彼の手はファスナーを下ろし終わると、ゆっくりと動いて私の肩から衣服を滑らせた。

下着姿の自分を彼の前にさらすのが恥ずかしくて身をよじろうとする。途端に、彼の手が優しく私の肩を拘束した。

「どうして隠すんです？」

「だって、こんな……恥ずかしい、です」

アイボリーホワイトのワンピースは腰のあたりまで落ちてしまっていて、私の身を隠してくれない。特に美しくもない体を見られて恥ずかしく思わないわけがない。

「恥ずかしい？ なにが？」

「だ、って……心の準備が」

「心の準備？」

「スタイル、悪いから、こんな明るいところでさらすのは、ちょっと抵抗があって」

コンプレックスばかりの体を厳さんに見られちゃうのは、どうしても恥ずかしい。

「残念だな。もっとじっくり見たかったです。今日のところは貴女の望む通りにしましょう。」

貴女に嫌われたくないですから、ね」

彼がベッドサイドへ手を伸ばすと、ゆっくりと部屋の明かりが落ちた。極力抑えられた明るさに、我知らず、ほう、と安堵のため息が漏れる。

「でも、そのうちちゃんと見せてください。私は貴女のすべてを目に焼き付けたいので。——ねえ、桃子さん、貴女は貴女が思う以上に綺麗ですよ」

「そ、んな……っん！」

否定しようとした口は、彼の唇で塞がれた。くちやくちやと音を立てて粘膜を舐られたあと、敏感になった唇を甘噛みされる。まるで私の言おうとしたことを咎めるように攻めてくる。そうされると、腰の奥がじんと熱く痺れた。

「今日だって貴女があんまり綺麗だから、誰にも見せたくなくてね。式も披露宴も二次会も三次会も全部すっぱかして、貴女とこういうことをしたくて仕方がなかつたんですよ。その衝動を抑えるのにどれだけ苦労したか」

厳さんはそう言いながら、困ったような、それでいて艶っぽい微笑みを浮かべる。なんという爆弾発言。彼の放った甘い言葉が私の理性をじくじくと奪っていく。

「あ……厳さ……、んああ……」

彼の指が私の喉から胸の膨らみへと滑る。ゆっくりとした動きは、まるでその行為の淫猥さを見せつけているようだ。恥ずかしいと思うのに、触れられた場所が快感を訴える。

「こんなに綺麗なのに……。隠すなんてもつたない」

艶にまみれた声で、笑いを含みつつささやく。

「あっ！ んっ、んんん……！」

彼が首筋を甘く噛みながら言うので、背筋がぞくぞくと震えた。体の奥の熾火がさらに熱をもつ。荒い息を繰り返す私の肌の上を、彼の唇がじらすように下りていった。

唇が向かった先には、先ほどの愛撫で硬く尖った頂。

その形を確かめるように、彼の舌がゆっくりとなぞった。

「ひうー！」

口に含まれて転がされると絶え間なく快感が襲ってきて、シーツに爪を立てて耐えることしかできな

きない。もう一方の膨らみは彼の手で揉みしだかれていて、そこからも甘い刺激が湧き起こっている。

自分がどんな顔をしているのか、どんな声を上げているのか、どんな風に身をくねらせているのか、考える余裕もなく、ただただ彼の指と唇によって乱された。

「……っは……あ……んっ……やっ！」

「嫌じゃないでしょう？ こんなにここを硬くして」

「んっ！ あ、ああっ！ そこ、やあ……」

硬くしこった胸の先端を指できゅっつつかまれて、腰がびくりと跳ねた。痛いはずなのに、気持ちいい。

なんで？ どうして？ 頭が混乱する。

しんと静まった部屋に、卑猥な喘ぎと、彼が私の胸を舐るたびに起こるぴちゃぴちゃという音が響く。

——想像していたより、ずっと生々しい音と快感。気持ちいいと思う反面、戸惑いも感じる。自分が自分でなくなるような感覚に襲われながらも、徐々に快感は高まっていく。体は心を置いてきぼりにして、性急にもっと強い刺激を求める。

彼の愛撫に酔い、そんな自分が怖くなり、それでもやっぱり快感には抗えなくて、身悶える。胸への刺激はとて甘く、ときに意地悪で、私をひどく翻弄していた。けれど……

——なにかが足りない。

本能を象徴する場所が焦燥を訴えていた。お腹の奥が熱くて苦しくて、どうしようもないくらい切ない。

その切なさは太腿をすり合わせても、体をよじつても消えることはなくて、逆に肥大していく。辛くて、無意識のうちに殿さんの腕を強くつかんでいた。

「もう、そろそろ……いいかな」

呟きとともに、彼の指が私の腹を這い、その下へと伸びた。

足の付け根にある割れ目を、下着の上から軽くひと撫でされる。同時に、くち、と粘着質な水音が耳に届いた。

「あう！」

腰がびくりと大きく跳ねる。

「や、だ！　そこ、ダメえ！」

過ぎた快感は恐怖を呼ぶ。

下着の上から撫でられただけでこんなふうになっちゃうなんて、この先を知るのが怖い。

「大丈夫。落ち着いて」

耳元でささやきながら、彼は私のそこにあてがった指をゆつくりと動かした。聞くに堪えない水音がして泣きたくなる。

「あ……！！　んっ、あ、ああ！」

彼の指が何度か往復しているうちに、快感のやりすごし方を体が覚え始めた。

「そう、いい子だ。怖くない」

耳元で繰り返しささやかれる声に、心も落ち着いていく。

「はあ……。……殿、さ……。も、大丈夫……」

しばらくして、私の恐怖心が消えたと悟った彼は、私の下着をゆつくりと脱がせた。

生まれたままの姿をさらすのは恥ずかしい。けれど、それ以上に彼と一つになりたい気持ちが大きくなっていった。

「少しずつ慣らしましょう。痛かったら言うてください」

額に汗をうつすらとじませた彼が、気遣うように私の顔をのぞき込んできた。さつきより少し赤くなった頬と情熱的な目に、彼の興奮を感じ取って嬉しくなる。

——殿さんも、私のことを欲しいと思ってくれてるんだ……！

「はい。……んっ！」

彼の指が亀裂きれつに触れる。数回、濡れたそこをくすぐったあと、ゆつくりと中に分け入ってきた。じゅぶ、と卑猥ひわいな音が立つ。恥ひずかしいくらいに濡れていた。けれどそのおかげか、痛みはほとんどない。少しちりつとただけだ。

「あ……ああつ！ んっ、や、やあ……」

それより大きかったのは異物感だ。自分の中に、自分でないものがある感覚。違和感があり、消えたはずの恐怖おそが蘇よみがえってくる。

「あ、やつ、ああああ！」

ゆつくりと、しかし確実に奥へと侵入してくる彼の指。

根元まで入りきった指で内壁を撫なでられた瞬間、恐ろしいくらい甘い戦慄せうりつが背筋を駆け抜けた。それはもう錯乱さくらんするくらい強烈で、それまで抑おさえていた恐怖心が爆発した。

「んっ、ああああああ！ いや！ もう、ダメえ！」

「桃子さん!」

「や、もう、怖いの！」

怖いと口にしたのが呼び水になったのか、涙がポロポロとこぼれた。不安と焦燥しょうそうと、期待と、異物感と、小さな痛みと、そして耐たえられそうにもないほどの強い快感。全部がごっちゃになって、混乱した。

これ以上の官能を知ったら自分じゃなくなる気がした。もつと先を知りたい気持ちもあつたけれ

ど、それより恐怖のほうが勝まさっていた。この先の快感を知ったら、私はどうなってしまうの？

「ご、めん……なき……い。自分が、自分じゃなくなるみたいで……その、どうしても、怖くて……ごめんなさい。ごめんなさい。ごめ……」

「そんなに謝らないで」

泣きじゃくる私を抱き起こした彼は、そつと抱きしめてくれた。広い胸に包まれている安心感で、さらに涙が止まらなくなる。

「で、でも、わた……私……痛かったわけでも……厳さんが怖かったわけでもなくて……」

「いいから。気に病やまないで。痛かったんじゃないならよかった。さつきも言ったでしょう。ゆつくりでいいんです。ゆつくり心の準備をして、慣れていけばいい。ね？」

私の頭を優しく撫なでながら、厳さんは大丈夫だ、気に病やむなど繰り返す。

その優しさが嬉うれしくて、自分が情けなくて、子どものようにわんわんと声を上げて泣いてしまった。けれども彼は呆あきれもせず、私が泣き疲れて寝入るまでずっと付き合ってくれた。



そんな申し訳ない初夜から一か月。

ここは私たちが新婚生活を始めたマンション。そして現在の時刻は午前七時三十分である。南向きのリビングに、燦々さんさんと朝日が差し込んでいる。

数か月前の私にとっては起床時間。今の私にとっては夫、厳さんの出勤時間だ。彼は、彼の両親が共同経営する弁護士事務所で働いている。事務所は家から少し離れているため、朝はいつも厳さんのほうが早く出るのだ。

お見送りのために玄関に立った私は、彼が靴を履くのを眺めていた。ほどなく彼はピカピカに磨かれた革靴を履き、かがんでいた体をまっすぐに伸ばす。すると私は首が痛くなるくらい見上げないと目を合わせられない。結婚式の衣装をオーダーメイドする際に聞いたところによると、厳さんの身長は百八十八センチらしいので、私とはちょうど三十センチ差だ。

一分の間もなく整えられた髪に、細いメタルフレームの眼鏡をかけ、仕立てのいいダークグレーのスーツに身を包んだ彼は威厳に満ちている。

ちよっと迫力があり過ぎて、初見では怖いと思う人もいるかもしれないけど、本当はとても穏やかで優しい人なのだ。

「行つてきます。帰りは遅くならない予定です。事務所を出るときに電話かメールを入れます」

「はい！ 行つてらっしゃいませっ」

勢いよく返事してから、『ませ』はないよね、と自分に呆れてうなだれた。まるで店員さんがお客さんと話すときの口調みたいだもの。

失敗したと思ったのが顔に出ていたのだろうか。厳さんは励ますように私の頭をポンポンと叩く。目線を上げたところ、彼の優しい眼差しにぶつかった。微笑む彼につられて私も笑うと、それでいいと言うみたいに頷く。

それから彼は「では」と短く告げて身を翻した。が、玄関のドアノブに手をかけた瞬間、ぴたりと動きを止める。

どうしたのかな？ と私が首をかしげると同時に、彼はくるとこちらに向き直った。

「忘れ物をしました」

手にしたビジネスバッグを床に置きながら言う。靴を脱いで自分で取りに行くつもりなのかな？ でも、彼が靴を脱いで探しに行つて、また戻ってきて靴を履いて……って面倒だよ。私が行くほうが早い。

「忘れ物ってなんですか？ どこに置いたか覚え……なっ!？」

尋ねながら部屋のほうへ戻ろうとした途端、厳さんの腕が腰に巻きついた。次の瞬間、ぐいっと引き寄せられ、背中が彼と密着する。

「なっ、なななな？」

訳がわからず混乱している私の鼻先を、彼の香りが微かにくすぐった。

うしろから抱きすくめられたらしいということは理解したんだけど、なんでそうされているのかはわからない。

あれ？ 厳さんは忘れ物をしたんだよね？ なんでこんなことになってるの？ っていうか近くないですか!？」

「いつ、厳さん？ あの……忘れ物は……？」

「ええ、ですから貴女に逃げられては困るんです」

「逃げる？ 困る？」

ますます意味がわからなくておうむ返しに尋ねると、彼は腕をほどいて私をくると反転させた。至近距離で向かい合わせる格好。しかも彼の両手は私の肩に乗っている。

こっ、これはどういうシチュエーションなのかなっ!?

えっ、えっ、これって二次元の場合だとキスシーンに繋がる感じなんですけど……混乱のあまり、オタク的な妄想に意識が逃げてしまった。

まさかね。生真面目な厳さんに限って朝からそんなことしな……って！ えー！ まさか、まさか！

私が目を白黒させているのにかまわず、厳さんの顔がどんどん近づいてくる。伏せられた目を長いまつげが縁取っているのが目に飛び込んできた。そんなところに色気を感じて、胸がどきりと大きく跳ねる。

「厳さ……」

うわずった声で彼の名前を呼んだのとはほぼ同時に、左の頬に柔らかくて温かいものが触れ、すぐに離れた。

まさかのまさか。これは……！

「キ、キスう!？」

動揺のあまり素っ頓狂な声が出た。

「嫌でしたか？」

「まさか！」

困ったように聞かれて、私はブンブンと首を横に振った。嫌だなんて思っわけがない。ただちよつと動揺しただけだ。

「よかった。では」

「はいっ！ 行ってらっしゃい」

彼は、なにごともしなかったかのように冷静な顔で出かけていった。

残された私は、彼の唇が触れた頬を押さえながら、へなへなとその場にへたり込む。

行ってきますのキスぐらい、新婚だったらどこの夫婦でもすることだろう。

でも、でも、でも！ 私には少々刺激が強過ぎる。

なぜなら、彼に大迷惑をかけたあの初夜以来、彼と私の新婚生活はとても清いものでございまして。さっきのキスが最大接近だったりするのです。動揺するなど言うほうが無理です。

そういうわけなので、朝っぱらからのこの不意打ちは衝撃だった。まだ動悸が治まらない。

こんなことならオタク活動ばかりしてないで、もつと恋愛経験を積んでおけばよかつたかな……と不毛な後悔が湧いた。同時に、いざというときパニックになる、自分の不器用さと焦りやすい性格にも絶望する。

——私はいわゆるオタクってやつだ。物心ついた頃にはすでにオタクの片鱗へんりんがあり（面親談）、小学校卒業時にはしっかりとオタク女子化していた。小学校の高学年と言えばクラスの女子たちがキヤーキヤー言いながら少女漫画を回し読みしていた頃。でも、私は某格闘漫画にハマっていた。

極限状態のバトルと男の友情に感動し、寝る間も惜しんで情熱を傾けたものだ。

それは中学に入学しても変わらずで……。周りの女子たちが『〇組の△君が格好いい！』『三年の□先輩ステキ！』なんて言い合っているのに『そーかもねー』なんて適当に相槌を打ちつつ、某スポーツ漫画の主人公とライバルの、熱くて固い絆に血をたぎらせた。

情熱の赴くままに二次創作を手にとってからはアンストツパブルだったよね。それ以来、アニメ、ゲームに漫画に小説、BLだって男女の恋愛だってなんでもどんとこい、明るいコメディから心が削れそうになるダークな話まで美味しくいただきます！ という雑食さを發揮。高校生になって、短大に入っても、社会人になってもぶれることなく、ずーっとオタクライフを満喫していた。

とはいえ、周りの目は気になったから、隠れオタクを通してきたんだけど。

そんな私のリアルな恋愛事情はというと、合コンに誘われるときはネタ要員か数合わせ。親しくしていた男の人も少なく、美貌も恋愛スキルもない私に言い寄ってきてくれる人なんていなかった。恋人ができないのは少し寂しいけれど、でも私には二次元がある！ とオタクライフを満喫していたのだ。そもそも二次元より優先したいと思うような男の人と出会わなかったしね。

だが、そんなふうのんびりしていたのも二十三歳くらいまでのこと。その頃から友人たちがちらほらと結婚し始めたのである。ちよつとマズいかなあと焦り始めたものの、男女交際などまったく未経験な私が、急に恋人を作れるわけがない。

もうこれは一生おひとりさまを覚悟したほうがいいんじゃないかと思っていた。

恋人いない歴、イコール年齢。その記録を生涯更新し続ける未来を想像し始めた二十五歳の

夏……一件のお見合い話が舞い込んだ。

相手の男性のハイスペックさに驚きつつ、紹介してくださった方の顔を潰さないために、とりあえず向かったお見合いの席。そこで私はすっかり恋をしてしまったのである。久瀬厳さんに。

もつとビツクリなのが、その恋が実ってしまったことだ。

顔よし、スタイルよし、性格よし、将来を有望視されている弁護士さんと、オタクで可愛くもなければ頭が切れるわけでもない、どこからどう見ても地味な私。そんな私たちが、まさか共白髪を誓うことになるなんて！

しかも厳さんは、恋愛経験の乏しさゆえに、思っていることを上手く言葉にできない私を、根強く見守ってくれている……。んだと思う。初夜から今に至る夫婦生活（主に夜の、が付くほうね）に関するあれこれは、その最たる例だ。恥ずかしがってばかりではダメに決まっている。わかっている、勇気ってなかなか出せないものなんだよね。だって、取った行動がますます事態を悪化させたら？ そう思うと怖くて怖くて。

「でも、いつまでもこのままっていうのも……」

結婚して一か月、そろそろ体の関係をもちたいと思う。

心身ともにもつと厳さんと打ちとけて、本当の夫婦になりたい。厳さんと自分の間にある壁のよなものを壊したい。

厳さんは親しい友だちやご両親とは砕けた口調で話すのに、私に対してはいまだに敬語だ。それってあんまり親しい間柄だと思われていないからじゃない？ 一線越えた関係になれば親近感を

抱いて、私に対しても敬語をやめてくれるんじゃないかと考えている。

でも、初夜でやらかしてしまつたから、もうそんな機会はないのかな……

「ああ、もう！　なんであんなことしちゃつたんだろ……」

あんなことをしてかさなかつたら、こんなに悩まなくてすんだのに！　一か月前の自分を殴りた。思いきり殴りつけて正座させて説教したい。いくら未経験だからってさ、あんなにパニックを起すことないじゃない。仮にも二十六にもなつた大の大人がすることじゃなかつたと思う。

「もう、私のバカバカバカバカー！」

思いつき拒んじやつた私が全面的に悪い。あれだけ拒絶されたら誰だつて、次に誘うのに二の足を踏むよね!?　だから、次は私から誘うべきなのはわかつてるんだけど……

「ああああ、どうしよう！」

両手を床についてじつと見つめる。

「はあ……。でも、いつまでも轟沈ごうちんしてるわけにもいかないよね……」

なんといつても平日の朝は忙しいのだ。

よつこらせ、と気合いを入れて立ち上がった。

落ち込む気持ちを引きずりながら、腕まくりをしてキッチンへ向かう。

「ちやちやつとお弁当、作つちやわなきや」

お弁当作りといつてもそんなにたいしたことをするわけではない。昨夜の晩ご飯と今朝の残り物を適当に詰めて終わり。厳さんのお弁当も作るならもつときちんとするけど、自分のだけだからこ

の程度で充分。

厳さんは昼食の時間も場所も不規則だから、お弁当はいらないと言われている。会食も月に何度かあるらしい。

もしかして気を遣つてくれてるだけじゃ？　と思つたりもするんだけど、勝手に作つて押し付けるのは気が引けて、結局お弁当作りは遠慮えんりょしている。

外食ばかりじゃ野菜不足になるんじゃないかという心配もあるけれど、厳さんのことだからそのあたりは自己管理していそう。念のため朝と夕はなるべく多くの種類の野菜がとれるように、極力努力している。

というわけで、漫画やアニメでよく見かける、夫が忘れたお弁当を妻が職場に届けて……というシチュエーションにはならなそう。お弁当は関係ないけど、妻が夫の職場を訪れると言えば、家に忘れた重要書類を届けるつてシチュもあるよね。だけど、抜かりのない厳さんが大事な書類を忘れるわけもない。

夫婦になつたら一度は体験してみたかったイベントおひなが行えそうにないのは残念だけど、厳さんが頼もしいつてことだから贅沢ぜいたくは言えない。

でも、働いている厳さんの姿を見たいな……

そうだ！　厳さんが内勤の日をあらかじめ聞いておいて、一緒にランチすればいいんだ。

でも、でも！　厳さんは私とランチに出かけたいなんて思っていないかも……いや、きっとそんなことないよね!?

ああ、せめて昼食くらい、自信を持ってお誘いできるようにしたい。厳さんにもっと近付きたいけど、あの初夜のことや頭に浮かぶと、途端に尻込みしてしまう。夫婦としてちゃんと体も繋がれたら、素直に思っていることを話せるようになるのかな。

どんだん気持ちは沈んでいくが、落ち込んでいても出勤の時間はせまってくる。私は慌てて荷物をまとめた。

「行つてきます！」

無人の室内に向かつて言いつつ玄関を飛び出し、慌ただしく施錠した。



私の勤め先は電車でひと駅なので、通勤にはドアトウドアで三十分もかからない。駅から徒歩三分の、外観がなかなかお洒落なビルの五階にある。

冊子やチラシ、フライヤー、同人誌の印刷、製本を請け負う印刷会社の東京営業所。私はそこで働いている。

オタクな私としては、この上もなく理想の職場。同僚もみんなオタクで話が合うし、なによりオタクを隠さなくていいのが幸せだ。

ちなみに私がオタバレを恐れるようになったのは、アニメと漫画に目覚めた小学生時代から。クラスの子に、とあるアニメについてちよつぱり熱く語ってみたら、翌日から遠巻きにされたこ

とがあった。それ以来、中学校でも高校でも短大でも、とにかくオタバレしないようにと努力してきたのだが、なかなか大変な日々だった。十数年、そうやってなんとかやってきたのに、厳さんにはお見合いしたその日にオタバレしてしまったのだけれど。脇が甘い自分が嫌になる。

それでも厳さんは、ありのままの私を受け入れてくれて……今に至るといわけだ。

こんなによくしてもらっているのに、恥ずかしいからってグズグズしていて、私は本当にダメだなあ。自分に対してうんざりする。

なんて考えているうちに、事務所の前へ到着していた。

「悩むのは中断、中断！」

仕事とプライベートはきちんと分けなくちゃ。頬をぺしつと叩いて、気持ちを切り替えた。

「おはようございまーす！」

努めて元氣よくドアを開けた。

「あつ、さく……じゃなくって久瀬さん！ おはようございます」

もうすでに出社していたアルバイトの江藤優里奈ちゃんが振り向いた。彼女は所内のみんなから親しみを込めてユリちゃんと呼ばれている。コスプレイヤーでもある彼女はいつもお洒落で可愛い。レイヤーさんの中には日に焼けるのを嫌って、一年中長袖を着ている子もいるらしいけど、彼女はあまり気にしていないようだ。今日の彼女の服装はベージュ色のジョーゼットの半袖ブラウスに、紺色のふんわりした膝丈フリーススカート。ウエストの大きなリボンがアクセントになっている。清楚で可愛い。

「ユリちゃん、おはよー！ 今日も……」

可愛いね、と言おうとして、それってなんかセクハラっぽくないか？ と思いき口をつぐんだ。尻切れトンボになってしまった言葉の先を探して、当たり障りのなさそうなことを咄嗟に口に乘せた。「……早いね。まだ始業まで三十分以上あるのに」

「え？ そうですか？ いつも通りですよ」

不思議そうな顔をされてしまった。確かにユリちゃんはいつも早く来ているので、今日だけが特別じゃない。

「あ、そ、そうだよね」

あはは、と笑って誤魔化したら、ますます不思議がられた。

「久瀬さん、どうかしたんですか？ ちょっと変ですよ」

お客さんの受付カウンターを拭いていた手を止めて、じっと私を見る。そんな大きくて綺麗な目で見つめられるとドキドキしてしまう。

小さな顔に、ぷっくりした可愛い唇。スタイルも抜群で、話は面白いし、気配りも上手。いいなあ。私もユリちゃんみたいになりたいという羨望の気持ちが湧いてくる。

彼女みたいに可愛くて話も上手だったら……今の厳さんと私の関係は違っていただろうか？

それこそ、結婚式の夜みたいな失態も演じなくて済んだのかな。いつか彼に嫌われるかも、なんて悩む必要もなかったのかも？ 嫌な考えがあとからあとから溢れてくる。ユリちゃんを見てこんなことを考えるなんて、私は嫌なヤツだ。ああダメだなあ。

ネガティブな思考を切り変えようと、ユリちゃんに向き直った。

「へ、変って……どこが？」

「いや、具体的にはわからないですけど、でも久瀬さんの様子が変なのは私にもわかります。なにか困ったことがあったんですか？」

ユリちゃんの『困ったこと』という言葉聞いた瞬間、今朝の一件をぼぼん！ と思いついてしまった。頬に触れた厳さんの唇の温かさとか柔らかさとか、私の耳元に微かにかかった吐息とか！ 見る間に頬が熱くなった。すると私をじっと見ていたユリちゃんが、なにかを察したようににやりと笑った。おそらく私の顔は、ゆで上がったタコみたいに真っ赤になっているんだろう。

「なっ、なにを言い出すの、ユリちゃん！ なにもないってば！ いつも通り！」

「やだ、久瀬さん、そんなに恥ずかしがらなくてもいいじゃないですか。よかった、そういう幸せ過ぎる理由ならいいんです。痴漢とか変質者に遭遇したんじゃないかと心配したんですよ」

いや、痴漢とか変質者とかは私みたいな冴えないヤツを選ばないと思うな！ むしろユリちゃんのほうが狙われそうで心配だ！

「そうですか、そうですか、御馳走様です」

彼女は鼻歌まで歌いだしそうなくらい楽しげだ。

「ちょっと、ユリちゃん！ ひとりでなに納得してるの！ なにもないってば！」

「なにもないってことはないでしょう。新婚さんなんですから！ 旦那さんって夜はどんな感じですか？ 結婚式で見るときはすごく優しくそうでしたけど、ぐいぐい攻められちゃったりし

て!」

前のめりになって聞いてくるユリちゃんに、私はなにも答えられない。

新婚生活一か月にして、頬にキスされるのが一大事だなんて……。情けなき過ぎて絶対言えない。

「なっ……ふっ、普通だよ……」

目を逸らしてぼそぼそ答える。そんな私を見ているユリちゃんは上機嫌だ。

「はいはい。久瀬さんが恥ずかしがり屋さんなのは知ってます」

彼女はそう言って、にやにやしなからカウンター拭きを再開した。

ユリちゃんよりは私のほうがかなり年上なはずだけれど、勝てる気がしない……。私の経験値が圧倒的に足りないのだ。

ユリちゃんが当たり前のように夜の話をしてきたことで、不安と焦りが加速する。やっぱり、今のままじゃ夫婦って言えないのかな……

厳さんの優しさに甘えてばかりいてはダメだ。自分で引き起こした失敗なのだから、自分でなんとかしなきゃ。

「でも、どうしたらいいんだろう……?」

答えは見つからないまま、一日が過ぎていった。



お出かけ前のキスは、あの日以降毎日厳さんのリードで行われて、近頃では習慣化した。

毎朝、頬に軽くキスされるだけでとろけそうな幸せを感じる反面、日ごとに焦りが募る。

仕事を終えて帰宅した私は、リビングのソファに座ってあれこれ考えていた。厳さんの帰宅予定時刻まであと二時間。夕飯の仕度はもう済んだので、思う存分、考え事ができる。

——行ってくるキスをするようになってから、厳さんに接近する回数は確かに増えたけれど、夜の彼は相変わらず紳士的な距離を崩さない。

厳さんは私の心の準備ができるまで待ってくれているのだと思う。

私はというと、心の準備はできている……はず。でも、どうやって誘えばいいのかわからなくなにもできないでいる。

しかし、キスが増えたことで『彼に嫌われてる?』という心配は減ってきたし、今度は私ががんばらなくちゃ!

よし! ここは私から厳さんにアプローチするしかない! そう。私から誘うのだよ! まだ不安は大きいけれど、いつまでもうじうじしてられない。心の準備ができたって伝えるんだ!

……でも、どうやって?

『厳さん! 私とエッチしてください!』とでも?

言えるか、そんなこと！

じゃあ『厳さん、初夜の続きをしませんか？』とか？

いやいや、これも無理！ 恥ずかし過ぎて、言うだけでパニックになってしまいそうだ。

ああ、口に出して想いを伝えるのって難しい……

じゃあ、言葉じゃなくて態度で示してみる？ それとなく接近してみたり、そういう雰囲気を作ってみたり？

——それならできそうな気がしてきた。恋愛スキルがないなんて言ってられない。行動しなくちゃ、なにも変えられないんだよ！

行動あるのみ！

名付けて『旦那さま誘惑作戦』。

こ・れ・だ！

——というわけで。少ない知識を総動員して、私なりに誘惑を仕掛けることにしたのです。



厳さんを誘惑しようと思いつてから数日後。もう寝るばかりとなった寝室で、思いきってこんな話を持ちかけた。

「厳さん、お疲れでしょう？ マッサージしましょうか？」

初夜でパニックになって以来、厳さんと親密な距離で触れ合っていない。ソファに並んで座るときも、不自然じゃない程度に距離が空けられているし、抱きしめられることもほとんどない。唯一の例外は行ってきますのキス。

そこで私は、初夜以降に開いてしまったこの距離を縮めることから始めようと考えた。

思いついたのはマッサージ。全身に触れてスキンシップを取りつつ、身も心もほぐれてムフフ、という効果を狙ってみた。

しかし……

私の言葉に厳さんが答えようと口を開きかけた途端、携帯電話の着信音が鳴り響いた。

「ひゃあー！」

まさかそんな邪魔が入ると思っていなかった私は、奇声を発して飛び上がった。

しっ……心臓が、痛い……

ドキドキバクバクする胸を押さえて、はああああ、と大きく息を吐く。深呼吸、深呼吸。

「大丈夫ですか、桃子さん」

「あ、ハイ。どうぞおかまいなく……それより電話、出ないと」

鳴っているのは厳さんの携帯だ。いまだ着信を告げている。

早く出ないと切れちゃいますよ！ 視線でそう訴えると、厳さんは不機嫌そうにスマートフォンへ手を伸ばした。

「ちっ、伊月のヤツ、こんな時間にかけてきやがって」

着信画面を見た厳さんが乱暴な口調で言った。

伊月さんなら仕事の話じゃないですか!? 早く出てくださいーっ!

内心でハラハラしながら見守っていると、彼はようやく通話を開始した。

「おい、伊月。こんな時間になんだ?」

伊月さんは、厳さんの大学時代からの親友。もともと厳さんはただの腐れ縁だと言って否定するけれど。今は同じ事務所でも働く弁護士さんで、私も何度かお会いしたことがある。伊月さんは華やかな雰囲気の方で、いつもにこにここと笑っている。厳さんとはタイプが違うけど、彼もまたイケメンで、とにかく人目を惹く。そんな二人が楽しげに笑い合っていたりすると、これがもう……! いけない、腐った妄想が止まらなくなってしまった。

「その件か。それ、明日の朝でいいだろ? こんな時間に電話してくることか?」

厳さんの、伊月さんに対する口調はいつもこんなふうにごんざいだ。一番心安い相手だからなのだろうけれど、いまだ敬語で話しかけられている私としては、ちよつと羨ましい。

「ああ、そっか。お前、明日は先方に直行なのか。じゃあ仕方ないな。少し待ってる。パソコンを立ち上げるから」

話しながら、厳さんはベッドを下りた。おそらく書斎へ向かうのだろう。

寝室のドアを開け、厳さんはすまなそうな顔で振り向く。

私が気にしないで、の意味を込めて笑顔で手を振ると、彼は小さな微笑を残して出ていった。

「お仕事、大変そう」

呟いて、ベッドへごろんと横になった。

意を決して旦那さま誘惑作戦を始めようと思ったけど、早速失敗。でも仕方ないよね。お仕事だもの。

理性ではそうわかっているのに、肩すかしをくらった気分。それと同時に、ほつとしたような気持ちも湧いてくる。そして、そう感じてしまう自分自身にうんざりするのだ。

「……伊月さんが羨ましいなあ」

心の声がぼろりと漏れた。

ああ、こんなこと思っちゃう自分が本当に嫌だ。

枕をむんずとつかんで、八つ当たり気味にぎゅーっと抱きしめた。そこに顔を埋めて「うー」とか「あー」とか唸る。

そうしてしばらくゴロゴロしていると、唐突にドアが開いたので慌てて飛び起きた。

「もっ、もういいんですか?」

厳さんがこの部屋を出ていってから、まだ十五分ぐらいいしか経っていない。

「ええ。もう用事は済みました」

彼はそう言い、にっこり笑ってベッドへ腰かける。

「まったく、気の利かないヤツだ。せつかく貴女と楽しい時間を過ごしてたのに」

肩をすくめて苦笑いをした厳さんは、先ほどと変わらず穏やかな様子。しかし、『楽しい時間』という言葉が妙に意識してしまった私は一瞬にして狼狽する。